

やまんばは、魚をばりばり食うと、また、

「これまで。馬の足、一本おいてけ。おかざあ、おまえをとって食うぞ」と、追いかけてきました。馬方は、馬の足を一本ぶったぎって、

「それっ」と、うしろへ投げ、三本足の馬で、ガツタガツタと逃げていきました。やまんばは、馬の足をばりばり食うと、また、

「これまで。馬の足、もう一本おいてけ。おかざあ、おまえをとって食うぞ」と、追いかけてきました。馬方は、もう一本ぶったぎって、

「それっ」と、うしろへ投げ、二本足の馬で、ガツタガツタ、ガツタガツタと逃げていきました。やまんばは、その足もばりばり食うと、また、

「これまで。馬の足、もう一本おいてけ。おかざあ、おまえをとって食うぞ」と、追いかけてきました。

「馬方やまんば」 『日本の昔話5』 小澤俊夫再話／福音館書店

馬は足を切られてもちゃんと走りつづけています。速度も落ちていないようです。血も流れていませんね。だいたい、馬方はどうやって馬の足を切ることができたのでしょうか。まるで切り紙細工のようです。

鬼の大将は、

「じいさんがこんなにおしがる場所をみると、よほどだいじなものにちがいない」といって、こぶをすぼんととってしまいました。そして、

「あしたの晩来たら、かえしてやる」というと、鬼たちをつれてかえっていきました。

じいさんはぼかんとして、右のほおにさわってみると、こぶがありません。

「やいや、ほんとにこぶがなくなっている。こりやありがたい。よかった、よかった」

じいさんは、こおどりしながら家へかえりました。

……略……

とうとう、鬼たちはおこりだしました。

「もういい、もういい。おまえの踊りはたくさんだ。どうして、ゆうべのようにおもしろい踊りをおどらないのだ。もう、こんなものをあずかっておくこともない。さあ、かえしてやる」

鬼の大将はそういうなり、ゆうべあずかったこぶを、となりのじいさんの右のほおに、ぺたりとくっつけてしまいました。

となりのじいさんが、あたりをみまわしたときには、鬼たちはみんないなくなっていました。

こうしてとなりの欲はりじいさんは、両方のほおにこぶをぶらさげて、泣き泣きかえってきたということです。

「こぶとりじい」 『日本の昔話3』 小澤俊夫再話／福音館書店

とったりついたり、現実にはあり得ませんが、切り紙細工のように語るという性質で説明できます。

粉屋はこわくなって、悪魔にいうことをきくと、約束しました。それから、むすめのところへ行っていいました。

「むすめよ、おれが、おまえの両の手を切り落とさなければ、悪魔がおれをつれていくと  
いってるんだ。おれはこわくなって、それを約束してしまった。どうかゆるしておくれ」  
すると、むすめが答えました。

「お父さん、わたしのことは、お父さんのすきなようにしてください。わたしは、お父さん  
の子どもなんですもの」

そういって、むすめは両手をきしだして、切らせました。悪魔が三度めにやってきました。  
けれども、むすめは、切られてのこったうでに顔をふせて、長いこと、うんと泣いたので、  
またすっかりきよめられていました。

「手を切られた娘」『完訳グリム童話』小澤俊夫訳／ぎょうせい

粉ひきはひどくこわくなって、恐ろしさのあまり、言われたとおりにしますと約束してしま  
いました。そして娘のところへ行って言いました。

「娘よ、おまえの両手を切り落とさなければ、悪魔がわたしをひっさらっていく、と言  
うんだ。それで悪魔に約束をしてしまったのだよ。本当にすまないね」。  
おとうさんに娘が言いました。

「わたしのことだったら、おとうさんのいいようにしてちょうだい」  
そして、娘は両手を差し出すと、切らせました。悪魔が三度目にまたやってきましたが、  
娘は切り落とされた腕の先を目にあてて、おいおいと長いこと泣いていたので、やはりす  
っかり清められていました。

「手なし娘」『初版グリム童話集1』吉原高志・吉原素子訳／白水社

前者はグリム童話の第2版、後者は初版です。傍線部を見ればわかるように、手を切ら  
れるということ自体に何の描写もありません。血も流れないし、あたかも切り紙細工のよ  
うですね。肉体的な奥行きがない。

また、父と娘の会話文を見てください。特に初版は、どこにでもある日常会話のよう  
です。この行為に対する人物の精神的奥行きがありません。

王子は横になると、ねむりこんでしまいました。目がさめたとき、十二時十五分前の鐘が  
鳴りました。王子はびっくりしてとび起きて、泉へかけていき、そばにおいてあったコッ  
プにいったい水をみました。そして大いそぎで出口へむかってかけていきました。鉄の門  
から外へとびだしたときに、ちょうど十二時の鐘が鳴り、門がはげしいいきおいでしまっ  
たので、王子のかかとの肉がすこしばかり、きりとられました。

王子は命の水を手にいれたので、うれしくなって家路につきました。

「命の水」『完訳グリム童話』小澤俊夫訳／ぎょうせい

危機一髪であることを表すためだけにいかかどが切られています。王子は、少しも痛み  
を感じることもなくよろこんで城に帰っていきます。